

第三百二十一 ドロップス

教ゆる者の説明如何に懇ろなるも學ぶ者が熱心に練習せざれば料理の道を究め難し、幸に小山の妻君は料理を學ぶに一生懸命なり「お登和さん、それからラードで拵へるのは何う致しますか」お登和嬢「それはバターの時の通りにしてバターの代りにラードを一々塗ります、然しラードの時は大概手輕な胡麻化し料理にする方が多い様です、それはメリケン粉一斤ならラード四十目ですから即ち三分一の分量を只イキナリ粉の中へ混ぜて玉子の黄身一つと小匙一杯の鹽と焼いた時膨らせる為めに焼粉を大匙半分位入れて水で捏ねて一度展す計りです、それを直ぐペースに使ひますから斯う云ふのを召上るとモチノ、して齒へ付いて食べた跡が胸に持つて一度で懲々なさいませう、パイ計りは拵へ方で味が非常に違ひます、ペースがあるだけ物の味が良くなる處を悪くすると却て不味くします、ラードのペースなんぞはお拵へにならない方が宜う御座いませう」小山の妻君「爾うですか子、何でも西洋菓子は家で拵へるとモ一買ったのが食べられませんが、カステラなんぞも家で拵へたのと市中で買ったのは大層味が違ひます子」お登和嬢「市中のカステラは玉子が寡くつて粉が多くつて折々は亂れた玉子も交つて居ますから泡立てる譯になりません、多くは粉と玉子を搗鉢で搗るそうですから手製のカステラよりも味が重くつて胸に持ちます、あのカステラをケーキの種に使ふと西洋人は菓子で無いパンだと云つて食べないそうです、何でもお家で上手にお拵へなさる程心持の好い事は御座いません」妻君「此頃は市中でドロップスト云ふお菓子を賣つて居ます子、飴の固まった様な小さなもの、中に菓物の味が交つて居てよく壘詰になつてあります、あれなんぞも家で出来ませうか」お登和嬢「あれは何の造作もありません、菓子屋で使ふ浮粉と云ふものを買つて來れば誰にでも出来ます、浮粉は形ちを拵へる粉で菓子屋には何處にでもありますけれど素人に賣る事を厭がりません、大きな乾物屋でお買ひなさい、それを平たい箱へ詰めてドロップスの型を押しま

す、譬へば銀杏で横に押すと銀杏の形ちが半分出来ず、指で押せば

指の形が出来ます、ドロップスの形は半分だけ模様があつて半分は何にもありません、つまり爾うして拵へるからです、浮粉が無ければコルンスタッチでも出来ず、その型を小さく幾つも押し置いて原料は一斤の白砂糖へ水を大匙四杯位入れて弱い火で一時間程煮ます、その煮加減が工合もので水の中へポタリと滴らして見て直ぐ飴の様に固まれば丁度宜いのです、それを火から卸して菓物のシロップならば大匙二杯位加へますしレモンの絞汁なら矢つ張り二杯位ですがレモン油なら小匙に一杯半位です、シャンパンとかマルシキムとか云ふ酒類ならば大匙一杯位です、それを加へて混ぜて今の浮粉の中へちよい／＼と注いで往くと一時間位で固まってドロップスが出来ず、然し砂糖の煮方が悪いと一旦飴の様になつたものが一月も過ぎない内に砂糖に返へつてボロ／＼します、和製のドロップスにボロ／＼するのが多いのは煮方が粗末なのです、何でもあんなキャンデー類の菓子は砂糖に返ると不可ません」妻君「爾うですか、早速宅で致して見ませう、時にお登和さん、私にあんまり遅くなりませうからモ一お暇を致します、皆様も其内にはお戻りになりませう」お登和嬢「マア宜いで御座いませんか、御一所に御飯を召上つていらつしやいまし」と頻に引留めて人々の歸りを待ちけるに夜に入りて中川小山大原の山人廣海家より戻り來りぬ、

第三百二十一 母の不足

此に於てお登和嬢が心を籠めたる御馳走は早速人々の前に持出されたり、客も主人も皆な食卓を圍みぬ、客の大原は殊に今日の御馳走を賞翫し「お登和さん、僕も愈よ四五日内に海外へ出かけますから今日は昔の大原に立戻つて腹の裂ける程御馳走を戴きます、中川君、今日はカロリー表の制限を許して呉れ給へ、お登和さんの御馳走で食傷してもサラ／＼恨みと思はんから子」中川「アハ、僕等も随分腹が減つたよ、廣海さんが是非食事を差上げると言はれたけれども家に御馳走の支度があると云つて断はつたもの、斯んなに遅くならうと思はなかつた、お登和や、廣海さんの所で今度の日曜日来愈よ食道樂會を開く事に極まつたが丁度大原さんの洋行も直ぐだから一つには大原さんの送

別會を兼ねるのだ、其日には和女にも早く来て手傳つて貰ひ度いと云ふ事だ」お登和嬢「ハイノ、お手傳ひ申しませうとも」と勇んで答ふるは大原への心盡し、小山の妻君はお登和嬢の爲めに慮る所あり「子中川さん、私は先刻もお登和さんに申上げたのですが大原さんの洋行なさる後にお登和さんも西洋へいらつしやれる様な御工風をなすつたら如何でせう、家庭教育を取調べるにしても女の方が却てよく解る事もありませうし、食物の事を取調べるにもお登和さんがいらつしやれば此上無しです、私は家庭教育研究會の爲めにも大原さんの外にお登和さんを洋行おさせなさる方が利益だらうと存じます、今直ぐと云ふ譯になりませんが大原さんのお跡からは非お登和さんを洋行おさせなさいな」と熱心に勧むる所あり、良人の小山も賛成し「是れは名案だ、此上無しの名案だ、今の我邦に最も缺乏して居るものは何である」と云ふに母である、健全なる未來の國民を養成すべき母が無いのだ、然るに世人は教育々と騒いで居るけれども多くは父の方計りだ、母を作る爲めに絶叫して居るものは甚だ寡い、其癖家庭教育とか小兒の感化とか云ふ事は母の任務に屬する、家庭教育研究の爲めには男子を洋行させるよりも寧ろお登和さんの様な婦人を洋行させる方が得策と云ふべし、一つにはお登和さんの爲めにもなり一つには國家の爲めにもなる、失禮ながらお登和さんの洋行費位は何處からでも出るよ、廣海さんの方で出来なければ誰に話しても僕が調達する、何うだ子中川君一つ此事を奮發しては」と今は假初の話しにあらす、中川は即座にも答へ兼ねたり「ハア其事は何れ後の話しさ、大原君の跡からお登和を洋行させると云ふと何だか其處に秘密がある様に思はれてもならん」小山「それは君にも似合はん、秘密が無ければ構はんでないか、ナニも同行すると云ふ譯で無し、大原君が歐羅巴に居る時お登和さんは亜米利加に居ると云ふ風にしたら誰が何と云ふものか、それに家庭教育の事は中々廣い問題だから大原君一人の力で逆も充分調査が出来ないよ、大原君とお登和さんが手を分けて調査しなければ逆も好結果は得られんよ、決して私情を以て斟酌する場合で無い、國家の爲めにお登和さんの洋行を必要とするのだ子」と小山夫婦は熱心に説き勧むる、中川は無言、大原は聞くや聞かずや人々の談話を餘所にして一生懸命に御馳走を飽食して居る、當人のお登和嬢此の話しを耳にしなからんと臺所へ隠れて容易に出で來らず、

第三百二十三 經世論

お登和嬢の心は知る由も無けれども客の小山は尚ほ熱心に説く所あり
 「子一 中川君、僕の考へでは大原君一人に家庭教育全體の取調を任せ
 るのも甚だ無理だと思ふ、家庭教育は實に廣い問題だ、何の事にも關
 係して居る、イヤ關係する位で無い、社會全體の事一として其根本を
 家庭より發せざるは無し、一口に一國の文明と云ふけれども家庭を基
 礎としない文明は皮相の文明だ、先づ人の家庭が文明に進んでそれか
 ら社會を文明に進めたもので無ければ眞の文明と言はれまい、政治だ
 つて其通り、人の家庭が立憲制度の様になつて夫婦兄弟親子の間に各々
 其の分限を守る習慣が出来、幾人の家族があつても互に相侵さないで
 一家團樂和氣藹々とする様にならなければ政治上の立憲制度も到底圓
 滑に行はれんよ、ところで今の政治家を見給へ、口には立憲とか非立
 憲とか殊勝らしい事を言ふけれども果して其家庭が立憲制度になつて
 居るか知らん、一國の代議士と言はれる人で平生盛に立憲論を唱へな
 がら家に在つては酒道樂に耽り女道樂に荒み言語同斷亂暴狼藉朝から
 晩まで我が家庭に對して非立憲の好意をして居る横道曲の如き人物が
 政治家の中に無いとに限らん、爾んな世中に何うして立憲政治が旨く
 行はれやう、實業界も亦た其通りさ、ヤレ株式組織だの會社組織だの
 と共同の事業は澤山起るけれども株主や役員たる人に果してよく共公
 心があるだらうか、我が家庭に對してすら共公心も無く想ひ遣りも無
 く何でも主人一人の我儘を通す様な根性では何うして共公の事業を遂
 げる事が出来やうか、市街鐵道の大騒動なんぞはその好的例でないか、
 人の家庭に共同心が充實する様にならなければ實業界の共同事業も到
 底圓滿に發達せん子、それにモ一一つ斯ういふ事がある、我邦の政治
 家は明治の初年から國民に殖産興業を勧めて富を作れ／＼と奨励した
 者だ、殊に日清戦争後は戦勝の餘熱に乗じて中央銀行すら開放主義を
 執つた位、盛に興業熱を鼓舞した、實業家も無闇に金儲々々と云つて
 騒いだ、それが為め一時は殖産興業も發達した、富も作れた、金も儲
 かつた、ところがそれは一時の夢となつて覺めての後は不景氣に苦む
 事殆ど十年、寄つてたかつて青い息計り吹いて居る、あれは丁度人に

大食をしる／＼と勧めた様なものだネ、勧められたものは只無闇に腹一杯物を食べて一時は美味いとか面白いとか思つたらうが跡で胃病を起して五年も十年も悩んだと同じ事だ、人の身體に消化吸収の力を養はないで無闇に大食をさせたら其大食は却て害になる、國民の品性道徳を養はないで無闇に金儲を勧めるのは却て國民の害になる、丁度放蕩息子に金儲をさせた様なものだ、ソレ金が儲かった、ドシドシ遊べと圖に乗つて儲けた金の二倍も三倍も遣つて了ふ、随分實業家の息子には爾ういふ人もあるよ、畢竟親が悪いのだ、先づ息子の品性を養はないで金儲をしる／＼と教へるから爾んな事になる、國民も其通り富を消化吸収する力が無くつて不時に富を得たらば其國民は却て益々墮落する計りだ、富は國民の腹の中を素通りして忽ち外へ出て了ふ、國民の身體はそれが為め胃病を起して栄養不良になる、我國の有様は全く此の通りに違ひ無い、それでは何うしたら可いだらう、先づ國民の品性道徳を高めて人の家庭を改善した上秩序的に富を得る道を講ずべしだ、古人は衣食足りて禮節を知ると云つたが僕から云ふと先づ禮節を知らしめて後富を作るべしだ、野蠻人に衣食を足らしめても禮節は起らん、人を野蠻界から文明界へ導いて置いて其上で殖産興業を教ゆべしだ、今迄の勸業政策や殖産主義は根本に於て間違つた處があると思ふ、斯ういふ風に論じて行くと大原君の家庭教育取調一件は政治の根本にもなり實業の根本にもなり其外文學美術あらゆる方面の根本になるから到底一人や二人の力に及ばんでないか」と滔々たる經世の大議論、

第三百二十四 小兒の不幸

小山の大議論は主人の中川も客の大原も共に首肯する所あり、中にも平生沈黙なる大原は此に至りて何を感じけむ突然顔を擧げ「小山君、それは全く君の言ふ通りに違ひ無いが僕は爾ういふ廣い問題を取調べるよりも却て極く小さい問題から取調べて段々大きな事に及ぼす積りだ、譬へば文明國の家庭では小兒が何う云ふ風に發達して大人になるかと云ふ事を調べたら是れが第一番の根本だらう、小山君からいつぞや小兒の洋服と云ふ話しを聞いた事もあるが洋服で育てると和服で育

てるのと何う云ふ差がある、食物の關係は何である、それから段々大きくなつて何う云ふ風に育てられるかと斯う云ふ點を調べるのが家庭教育の根本だと思ふ子」と大原も亦た確乎たる意見あり、中川案を拍ち「それだ／＼、それが尤も今日の急務に違ひ無い、もしも人の發達の經路を調べたら我邦の小兒ほど不幸なものはあるまい、食物と衣服と家屋の三點は無論だけれどもそれを別にして我邦の小兒は言語を知ると云ふ事に就いて非常の困難がある、英國人の小兒が人を招く意味を現はし度い時には誰に向つてもカム即ち來れと云ふ一語を知つて居ればそれで濟む、我邦の小兒は犬を呼ぶ時ワン／＼コイ／＼と教えられる、友達に向つて誰さんコイコイと云ふと叱られる、おいでなさいとかおいでと教へられる、もしや親達に向つて母様コイ／＼と云ふと大層叱られる、其時はいらつしやいと言はなければならん、物を欲しがる時何をお呉れと教へられる事もあるし頂戴と教へられる事もある、親達の眞似をして何をよこせと云つて叱られる事もある、英語ならば誰に向つてもギーヴミーの一語で濟む處を我邦の小兒は三通りも四通りも言語を覚えなければならん、少し大きくなつて文字を習ふとサテ一層の困難だ、英語で人を招く意味にカムと云ふ一語を覚えれば文章を書く時でも手紙を書く時でも矢張りその語を使へるけれども我邦では手紙にコイ／＼ともおいでとも書けない、ヤレ御入來下され、御來車下され、御狂駕下され、御來臨下され、御貢臨下されなんぞと一つ事を十通りも知らなければならん、譬へばスナハチと云ふ詞にも即の字があり、乃の字があり、則の字があり、便の字があり、ヨルと云ふ詞にも因の字があり、由の字があり、縁の字があり、憑の字があり、據の字があり、依の字がある、言葉の時に英國人の小兒より四倍も五倍も苦しんだ上に文字の時も十倍も二十倍も苦まねばならん、自分で書く時は誰に向つても簡便な文字で押通す事も出来るがそれを一々知つて居なければ人の文章を読む事が出来ない、殊に困難を感じるのは今所謂の自稱文學者とか自稱美文家とか云ふ先生達の文章だ、僕等如き専門の文學者でさへ振假名を宛にしなれば讀む事の出来ない文字が澤山ある、解り易い文字で書けば誰にでも讀めるものを態々六か敷い文字を並べて無理な振假名をつけてある、振假名を讀んで見てあ、成程斯う讀ませるのかと漸く合點する様な場合がある、意味を現はすのが文字の本能であるべきに態々意味の現はれない様に書いてある、

モ一一つは聞いて解らない文字が沢山ある、譬へば新體詩なんぞに汝と書いてナと讀ませてナの倂とかナの姿とか讀ませる、文字を見ずに只聞くと菜の花が幽靈になつた様だ、少年時代に散々困難した上大きくなつて他人の意思を知らうとすると又々斯んな困難を経なければならん、僕の如きは成るだけ人に解り易く文章を書かうと思ふのに態々解りにくく、書き度がる人がある、言語文章は意思を傳へる道具だから成るだけ透明で解り易くなければならん、硝子箱へ物を入れた様に中の品物が見え透かねばならん、然るに我邦の文章とか文學と言はれるものは鐵板を累ね張りにしてある、エツキス光線かラヂューム線で無ければ中の品物を見る事が出来ないよ、アハ、」と此先生折々奇矯の事を言ふ、

第三百二十五 人の言葉

中川の言葉は奇矯なれども大原は深く感ずる事あり「中川君、我々が今迄その困難を感じて來たのは仕方無、又た今の文學者連中が獨りでよがつて居るのも其人の道樂として恕すべきだが將來の小兒にその困難を感じしめるのは如何にも氣の毒だ子、それ等の點は僕もよく取調べて他日我邦の言語文章を平易簡單に一定させる様にし度い子」中川「ところでそこに誤解されてならん事がある、世人はよく平易簡單と云ふと一番短い賤しい言語に傾き度がるからそれを注意しなければならん、汝と言ふのは長いからナで澤山だと云ふ事になつても困るさ、僕の主張は人を呼ぶのにナンヂとかアナタとかオマへとカキサマとか幾通りもある言葉を一つに定める時は其中の一番丁寧な言葉に極めやうと云ふのだ、僕が子供を持ったら誰に向つてもアナタと呼ばせる、下女下男から親兄姉に向つても他人よ呼ぶのにアナタの一語を知つて居れば濟む様にし度い、尤も外から色々な事を教へられて中々思ひ通りに行くまいけれども物を望む時は誰に向つても頂戴と云はせる、人を招く時は誰に向つてもいらつしやいと云はせる、犬に向つてもワンノ、いらつしやいと云はせる、コイノ、と言ふよりいらつしやいと云ふ方が六か敷いに違い無いけれども幾通りも覺える困難に比べれば一つだけ丁寧な言葉を覺えさせるのは何でも無い、英語だつてアナタ

と云ふ言葉とナンチといふ言葉と二通りあつたが今では丁寧の方のアナタ計り使つてナンチと云ふ言葉は廢された、英語では犬に物を言ふ時でもアナタだ、つまり人の言葉は丁寧な且つ綺麗な言葉に一定させなければならん、今の戀愛小説には華族の姫君が、アタイ斯うしてよとかイヤだワとか何うしたのよとかよくつてよとか下等社會の俗語を使つて居るのも折々見えるがあゝ、いふ言葉は文明の最も進歩しない野蠻人の言葉だ、簡單で無ければ下の廻らないと云ふ動物性の言葉だ、是れも小説計りではあるまい、實際に爾んな賤しい言葉を口にする姫君や令嬢が一人や二人はあるのかも知れん、女計りで無い、男の言葉は尚ほ亂暴だ、書生さんの中には我が両親に向つて僕は何處へ往つて来たよなんぞと折助言葉を吐く人がある、舌に病氣があつて往つて来ましたとか往つて参りましたとか言へないのであるまいし、丸で禮儀も作法も無くなつて居る、家庭教育は爾ういふ點を第一に正さなければならん、無用な言葉は廢して一番上品な言葉一つ知つて居れば濟む様にして行かねばならん、人に備はる美と云ふ點はそこにあるだらう、今の文學者は一方にアタイいやだワと云ふ様な動物的の言葉を書き一方に假名が無ければ讀めない様な六ヶ敷い文字を並べて純文學だとか美文だと云つて居るが成程双方の極端を寄せあるからアルカリ性と酸性とを中和させる量見かも知れない子」此に至て客の小山笑ひ出し「アハ、君の攻撃も随分皮肉だ子、それでは家庭教育論が文學論になつて了ふ」中川「イヤさ、是れが家庭教育に大關係あり、文明の進歩した清潔なる家庭に果して能く猥褻なる小説や淫靡なる文學を容る、や否やと云ふ點を大原君に調べて貰はなければならん」大原「宜しい必ず調べやう、其外にまだるか子」